

小樽飲酒ひき逃げ公判 被害者家族の意見陳述

札幌地裁で3日開かれた小樽飲酒ひき逃げ事件の裁判員裁判論告求刑公判で、被害者家族の意見陳述が行われた。陳述したのは順に、重傷を負った中村奈津子さん(31)の母輝子さん(60)、亡くなった石崎里枝(りえ)さん=当時(29)=の母日出子さん(65)、亡くなった瓦(かわら)裕子さん=同(30)=の母明子さん(64)、亡くなった原野沙耶佳(さやか)さん=同(29)=の母悦子さん(59)と父和則さん(62)の計5人。内容を詳報する。(1面参照)



【写真説明】小樽飲酒ひき逃げ事件で命を奪われた(左から)原野沙耶佳さん、石崎里枝さん、瓦裕子さん。この写真を撮影した数十分後に事故に遭った(遺族提供)

2度の手術 続くりハビリ 心の傷いつ癒えるのか

中村奈津子さんの母 輝子さん

私は、今回の事故の被害者である中村奈津子の母親です。娘は、今回の事故で重傷を負ったばかりでなく同時に3人の友人を亡くしており、意見陳述できる状況ではないため、私が代わって意見陳述させていただきます。

昨年7月13日の交通事故で娘は、第5頸椎(けいつい)骨折、右大腿(だいたい)骨骨折、第5、6頸椎左椎間関節脱臼、頭部挫創の重傷を負いましたが、九死に一生を得ることができました。出血が多かったため、私たちが病院に着く前に本人に確認して輸血もしたそうです。処置が終わり、救命救急病棟の病室に移された娘は、首はカラーで固定され、右の大腿骨が折れてずれていたため足も固定されてつるされ、血圧と脈拍の機械につながれ、自分で体を動かすことはできませんでした。

夫は勤務先から9日間休みをもらい、自動車で毎日、娘が入院している病院に2人で通いました。その後は8月26日の転院まで私が毎日電車で通院し、転院後は週2、3回病院に通いました。電車で通院しているときに、娘と同じくらいの年の若い女性がグループで楽しそうに話している姿を見ると、娘たちと重なり、思わず目を背けてしまうことが何度もありました。

7月15日に脚の手術を緊急に行い、看護師さんに手伝ってもらい車いすに乗って移動できるようになりましたが、8月6日には経過観察となっていた首の手術を行い、再び動けない状況になりました。左肩には強い痛みがあり、また、左腕の部分的なしびれは風が

当たっただけでもつらいものでしたし、頭も2カ所切れていました。頭の傷のうち1カ所は10針以上縫いました。娘の体はまだ完治していませんが、首の手術あとや、手術のために一部を切ったり刈り上げた髪もすっかり伸び、事故から1年弱の月日を感じています。娘はリハビリのために転院した病院を11月23日に退院し、実家に戻りました。

そして、娘の強い希望もあり、勤務先にもご配慮いただき、娘は12月17日から2時間働くようになりました。雪も積もり娘がつえをついていましたので、最初のうちは私が札幌駅まで一緒に付いていきました。今年の2月からは4時間働くようになり、雪も解け徐々につえを放すようになり、今年5月中旬ごろからは5時間、6月からは午前9時から午後5時まで働くようになりましたが、朝の会議には出ていませんし、忙しい時期の残業も皆さんより早く帰っています。

娘の話によると、背中と首と肩のこりや痛み、特に左肩は強く痛むことが頻繁にあるようです。そして、事故以前に行っていた銀行当番や掃除など体に負担がかかるものは代わってもらっています。体がつらくなると、何度か更衣室で休憩をとったり、デスクで休みながら仕事をしているそうです。娘はいつときも事故から離れることができないので、何もしていないよりは、事故のことを考えなくて済むため、働いているという面もあるのかと思いますし、必死に乗り越えようともしているのだと思います。一日も早く事故前と同じ勤務状況に完全復帰したいと思っているようです。

娘は、勤務するとともに週2回のリハビリにも通っており、まだ1人暮らしをさせるには不安があり、現在も実家に住まわせています。また、ただ歩いているだけでも30分くらいすると背中や肩、首が痛くなり疲れますし、食事をしていても首が疲れるのか、ときどき首を上にあげたりしています。首の上下左右に動く範囲も多少狭くなっています。左腕の部分的なしびれは少し違和感があるくらいまで良くなっていますが、たまに軽いしびれとかゆみもあります。

手術した脚は治りが遅く、今年の2月の検査でもほとんど骨がついておらず、レンタルの機械を借りて、超音波をかけることになりました。そして4月の検査でようやく骨ができてきましたが、まだ十分ではなく、走ることも禁止され、今も自主トレをしながら自宅で毎晩20分程度、超音波をかけています。また、長時間歩いていると、股関節の外側が痛くなり、また、膝の上も違和感があります。右脚をかばって歩いていますし、強い打撲で足首もまだ完全に曲がりません。今月の21日に脚の骨が治癒しているかどうかを確認することになっています。

首の骨については、今年の1月15日に医師からほぼくっついていると言われましたが、今月の21日に脚の骨と一緒に確認することになっています。このときに、娘の首や肩や背中の痛みなどのことも時間がかかっても良くなるのか、それとも後遺症になるのかを聞いてみようと思っています。

病院のスタッフ、職場の皆さん、友人たちに支えられ、娘は2度の手術を乗り越え、今まで頑張ってくることができました。

このような状況の中で娘は気丈に振る舞っていました。そして、転院の日が決まってから、私たち両親に対して「ばかなことはしないから大丈夫」「いずれ一人でやっていかなければいけないからリハビリは毎日来なくてもいいから」などと言ってくれました。そのことで私たちがどれだけ救われたか分かりません。娘は弱音を吐かず、転院した後もリハビ

りを頑張っていました。

その気丈な娘が、今回の事故後に、私の前で涙を見せたことが3度だけあります。1度目は、3人の友人が亡くなった事を私が伝えたときです。医師から手術をした後では精神的負担が大きくリハビリにも影響があるので、手術前に事故のことを伝えた方が良いと言われました。夫婦でどのように伝えるか悩みましたがまとまらず、その夜眠ることはできませんでした。

事故から2日目に娘に3人の友人が亡くなったことを伝えましたが、娘は、大粒の涙を右手でふきながら、必死にこらえ「もうそのことは言わないで」と言われ、その時から現在まで3人の話はしていません。

あとの2回は娘の入院中、7月24日と25日に警察官が、7月26日に検察官が事情聴取に来たときです。娘は事故のことは冷静に話していましたが、3人の友人のことを話すときは涙を流しながら必死に話していました。3人の友人にお線香をあげることもまだできておりません。高校時代からの3人の友人を失い、重傷を負った娘の心は到底はかり知る事はできませんし、娘も、言葉で言い表わすことのできるものではない、と思います。

娘は自分が車にはねられたことや、3人の友人も一緒にはねられたことも知らされて分かったようです。ですから、3人の友人が亡くなったなんて、到底受け入れられないくらいことだったと思います。あの日、朝からもっと強い雨が降っていたら、娘たちも出掛けることはなかったのでは…と思った時もありましたが、娘たちは何も悪くないのです。ただ被告人が飲酒運転をしなければ、こんな悲惨な事故に遭うことはなかったのです。

娘は事故以前と比べ、家では、いらいらすることが多くなり、口数も少なくなりました。5月30日に今回の事故に関するテレビ番組が放映されましたが、娘に見るか確認したところ、見ないと言って2階に行ってしまいました。先月起きた砂川の交通事故のニュースを偶然に見てしまったときも、私が「こういう事故のニュースを見ても大丈夫なの」と聞いたところ、娘は「普通の人みたいな気持ちで見ることはいけないけれどもね」と言っていました。当然娘は、自分たちの事故と亡くなった3人の友人のことを思い出していたのだと思います。そのとき私はそれ以上は何も聞けず、お互いに砂川の事故に触れることはしませんでした。

娘の体の傷は当初からみれば少しずつ回復してきましたが、心の傷はいつ癒えるのかとても心配です。私たち家族は、娘を支え、寄り添ってあげることしかできません。ただ、7月中に娘は親しい友人と事故現場に行ってお花を供えに行くと言っていました。心の整理がつくことは一生ないと言っていました。7月ということもあり、現場に行くことを決心したようです。

私の夫は被告人に対して「腹が立つ」「同じ思いをさせたい」と言っています。私は、この裁判で特別な事を求めているではありません。ただ、犯した罪はちゃんと認め、すべて正直に話し、しっかりと償ってほしいのです。3人の若い女性の命を奪ったことは絶対許すことはできませんし、3人の命が戻ってくることはありません。ですから、一生をかけて償ってほしいのです。

そして、この裁判で被告人を厳正に処罰していただくことによって、娘には被告人を恨んで生きるのではなく、二度と戻らない大切な友人ですが、どんなにつらくても3人の思い出と一緒に前を向いて強く生き抜いてほしいと願っています。

何人もひき殺し、逃げた 通り魔殺人と同じだ

石崎里枝さんの母 日出子さん

私は、被害者の石崎里枝の母親で石崎日出子と申します。この1年間、私たちがどんな苦しい思いで過ごしているのかお話しさせていただきます。

平成26年7月13日、それは石崎家にとって、奈落の底に突き落とされた出来事のあった日でした。

その日、午後8時ごろ、私が仕事から帰宅しましたら、夫が玄関に置いてある電話で誰かと話していました。その時の夫の様子がただならぬ気配でしたので、私は茶の間に入ってから「誰か具合が悪くなったのだろうか。入院している父なのかな、親戚かな？」と色んなことが頭を駆けめぐりました。

夫のただならぬ様子を感じ取り、電話の声に耳を傾けて聞いていた息子が「お母さん、里枝のことでないか？」と言いました。息子に言われるまで、里枝に何かあったなどということは少しも頭にありませんでしたので、思ってもみなかった言葉にもものすごいショックを受けました。そして、夫から「里枝が事故に遭って意識不明の重体だ」と聞かされました。

それから10分もたたないうちにまた電話が鳴りました。夫が出ましたが、腰が抜けたような状態で「里枝が亡くなったんだと…」と言いました。夫の言葉は私の頭に入らず、何を言っているのかこの時は理解できませんでした。

何が何だか分からないまま頭が真っ白になった状態で、夫とともに、里枝が運ばれたという市立札幌病院へ向かいました。普段、札幌に行くときは自動車で行くのですが、この時はあまりのショックのため、自動車を運転できるような状態ではありませんでした。そのため、美唄から電車で向かいました。

40分ほどの電車の中では、2人とも一言も話さなかったことを覚えています。この時に何を思っていたのか今は思い出すことができませんが、病院の霊安室に通され、そこで私たち夫婦は娘の変わり果てた姿を見ました。ぼうぜんとなり、悪い夢でも見ているのではないかと思いました。娘の姿が信じがたく、あまりのショックでただただ娘の遺体にすがってなでているのがやっとでした。

里枝の就職先は札幌だったので、美唄の自宅を出て札幌で1人暮らしをしておりました。そのため、事故のあった日に里枝が小樽へ行っていたことは知りませんでした。

病院で、刑事さんから、「海水浴の帰りにひき逃げされた」ということを聞きました。ひき逃げだということで、司法解剖をしなければならぬと言われました。娘の遺体を解剖するようなことはやめてほしかったのですが、私たちの願いも通らず、里枝の遺体は司法解剖をされてしまいました。傷一つない里枝の体が切り刻まれ、髪までそられてしまったのです。

なぜ里枝がこんな目に遭わなくてはならないのでしょうか。里枝が一体何をしたというのでしょうか。何の罪もない大事な娘がこんな目に遭うなんて信じられません。なんで私の娘なの？なんでこんなことになったのか、かわいそうで、かわいそうで、本当に悔しくてつらいです。

事故の次の日、小樽警察署に呼ばれ、事故現場へ連れて行かれました。報道の方がいっ

ばいいて、事故のあった場所へは近づく事ができませんでしたが、大体の場所は分かりました。この時に、警察の方から加害者の話を聞きました。

加害者は、大量の飲酒をしてスマートフォンを操作しながら、前を見ずに自動車を運転して4人をはねたというのです。しかも、4人をはねた後、一人も助けようとせずに、まっすぐコンビニへ行き、たばこを買ったという内容でした。

なぜ、大量の飲酒をした後に車でたばこを買いに行く必要があったのでしょうか。

なぜ、4人をはねた後、救急車を呼ぶこともなく、逃げたのでしょうか。4人をはねた後でたばこを買いに行く必要があったのでしょうか。私には理解できないことばかりです。こんな道徳も何もない人間とも思えない人に、私たちの大事な一人娘を殺されたのかと思うと悔しくて残念でなりません。

弁護士の事務所で証拠を見せてもらったことがあります。この時見せられた写真は、誰かが心臓マッサージをされているものでした。マッサージをされている人の足が少し見えていたのですが、足の形に独特の特徴があったのがわかり、里枝の足だとはっきり分かりました。今も、あの写真の里枝の足が目に焼き付いています。頭の中に写真で見た里枝の足が浮かんできて、いとおいしい、かわいそうな気持ちになります。

里枝は、家ではおとなしかったのですが、友達とは明るく楽しくしてました。幼稚園でのお遊戯会で楽しそうに張り切って踊っていた姿、その時のかわいい笑顔が今でも目に浮かびます。習い事は、中学までエレクトーンと英会話教室に通って頑張っていました。

私たち夫婦は旅行が好きだったので、子供たちを連れて色んな所に行きました。スキーやキャンプ、温泉など思い出がいっぱいあふれています。本当に幸せな時間でした。大人になってからは積極的に地元の子ども会にも参加し、子供たちからは慕われ、目上の人からもとてもかわいがられていました。

里枝が高校を卒業して専門学校へ2年間通い、憧れていた札幌に就職して1人暮らしを始めることになった時は、寂しい思いでしたが、でも、連絡はまめに取っており、里枝が元気でいたので安心はしていました。頑張り屋で真面目な里枝の口からは、愚痴とか人の悪口を聞いたことがありませんでした。

また、家は農家で10年くらい前からアスパラを作っていたのですが、里枝は学生のころから作業を手伝ってくれていました。5～6月の収穫の忙しい時期には、就職して札幌に行ってから、有給などをつかって何日も手伝いに来てくれていました。

去年の収穫時期は「どうしても仕事が忙しくて気持ちは手伝いたいけど無理だわ」と、すまなそうにメールを送ってくれました。手伝いに来てくれたら助かりますが、手伝いに来たいと思ってくれるその気持ちがうれしかったのです。その後、電話でアスパラの収穫が無事に終わったことを話し、「また温泉にでも行こうね」と話したのが最後になりました。

こんなに優しい子が、なぜこんな目に遭ったのか信じられないです。まだ、変な夢を見ているみたいです。夢だったらいいのに、と毎日思ってしまいます。里枝が帰ってこないと思うと怖いです。里枝がいなくなってから、夫はアスパラ畑に行くと、里枝のことを考えてしまうのがつらいと、アスパラ作りに対して意欲を失ってしまいました。

里枝が事故に遭う前の年、平成25年10月に、夫と里枝と3人で支笏湖へドライブに行きました。1人暮らしの経験のない私が「寂しくないの?」と聞くと、「全然楽しいよ!!!」って明るく弾んだ声で言いました。良い友達に恵まれて充実した毎日を送っているんだな

あと、安心していました。これから結婚とかいろいろな夢があったと思います。そんな里枝の気持ちを思うと、残念で無念だと思います。悔しいです。

残された私たちも、大事な一人娘を失い、花嫁姿も孫も見られなくなり、何の張り合いもなく、希望を失い、どうやって気持ちを立て直せばいいのかと思う毎日です。まだ札幌で暮らしていると思っていればいいのかと思ってみても、現実とは違います。里枝が気に入って住んでいたマンションから荷物を運びだし家に入れました。

仏壇には里枝の笑顔の写真が飾られています。写真の中の里枝は笑って私たちを見つめているけど、私はつらくてその笑顔を見ることができません。仏壇の前に長くは座ってはいられません。これから先、どうやって生きていけばいいのかわかりません。里枝と残された私たち家族が人生をめちゃくちゃにされたのです。こんなことをしでかした海津被告に何かを言ったところで娘は帰ってきません。

自動車は凶器と同じです。飲酒して運転したら、一層おそろしい凶器となります。その凶器を振り回して何人もひき殺し、救急車も呼ばずに逃げたことは許せません。通り魔殺人と同じだと思っています。海津被告には娘たちの無念をしっかりと感じ取ってほしいです。そして、その罪の重さと命の重さを感じてください。裁判員の皆さまには、どうか海津被告の犯した罪に見合った量刑にしてくださるようお願いいたします。

出口のないトンネルの中で一歩も前に進めない

瓦裕子さんの母 明子さん

私は、今回の事故の被害者である瓦裕子の母親です。家族を代表して私から意見陳述をさせていただきます。

昭和59年5月9日、私たち家族に6年ぶりとなる赤ちゃんが誕生しました。私が次男を出産してから6年ぶりの子どもでした。その子が一人娘の裕子です。

女の子ということで、夫と今は亡き夫の両親がすごく喜んでくれました。亡き夫の両親にとっては、初めての女の子の孫だったのです。

男兄弟の中で育った夫にとって、女の子はとてかわいくて天使のような存在だったのでしょう。私たち夫婦にとってかけがえのない大事な天使でした。

裕子は小学校の低学年までは泣き虫で甘えっ子でしたが、大きくなるにつれてしっかりと生きてきて、良いお友達にも恵まれたことで成長していきました。

裕子が中学のころは私とよく札幌まで買い物に行ったり、私にべったりでしたが、高校に入ってから、夏休みや冬休みにアルバイトをして、自分のお小遣いをためていました。母の日や誕生日には、必ずささやかなプレゼントを買ってくれました。

裕子は高校を卒業後、地元のスーパーに就職してくれました。何事にもまじめに取り組み、年上の先輩方や皆さんにいろいろなことを教わりながら社会に溶け込み、成長していきました。親の目から見ても頼もしく思えました。

このころ、今から10年ほど前の平成17年、夫が脳出血で倒れてしまいました。そして車いすでの生活となってしまい、夫をはじめ私たち家族は大変な苦勞をすることとなりました。

そんな中でも、裕子は私を助けてくれていました。

裕子と私は本当に仲良しな親子でした。

私はすぐにストレスをため込む性格なのですが、裕子は私の性格をよく理解してくれており、私を気遣って気分転換にと、ショッピングに連れて行ってくれたり、小樽、富良野へドライブに連れ出してくれたり、外食などに連れて行ってくれました。

本当に心が優しくかったです。

家族を思いやる心が強くて、私の具合が悪い時は食事を作ってくれました。たくさん、たくさん手伝ってくれました。

裕子がいつか結婚をして子供を育て、平凡で温かい家族をつくるものだと思っていました。裕子が孫を連れてきてくれ、楽しい時間を過ごせたら幸せだねと、裕子と話していたことが昨日のように思い出されます。

あの日、平成26年7月13日は日曜日で、裕子との夕食を楽しみに待っていました。

私が最後に裕子と会ったのは11日金曜日の夕方でした。裕子は私に買い物があるなら車で一緒に行こうかと誘ってくれたのですが、私は大丈夫だよと断り、裕子は1人で出かけて行きました。裕子が帰ったのはその日の夜遅くだったようで、私は既に就寝していて顔を合わせなかったのです。

翌12日土曜日、私は朝早くから仕事に出かけ、また、裕子は帰りが遅かったため顔を合わせることはありませんでした。

このようにいつもお互いの仕事の都合で一緒に夕食を取れないことがあるので、日曜日の夕食は一緒に食べられるねと、10日の木曜日に話をしていたことをよく覚えています。

その日、裕子が誰とどこに遊びに行ったのかは聞いていませんでした。でも、長男とは連絡をしていたようで、その日の夜7時に岩見沢の駅に着いたら、長男に迎えに来てもらう約束をしていたのです。

しかし、約束の時間を過ぎても裕子からの電話はなく、約束の時間を過ぎた7時20分ごろにかかってきた電話は、裕子からではありませんでした。

小樽警察署からでした。

私は電話で話したのですが、電話の内容が理解できず、一体何を言っているのだろう、「いたずら電話かな」と思ったのです。

恐らく私が話した相手は警察官だったと思うのですが、今思い出しても、相手が何を言っているのかよくわからないのです。

「奈津子さんのご両親がもう病院に来ています」と言われたような、「危篤です」と言われたような、とても曖昧（あいまい）な記憶なのです。ただ、「なっちゃんと一緒にだったんだ」と思ったのを覚えています。

長男の運転で札幌医大病院へ行きました。土地勘がなくて道がわからず、迷いながら病院へ向かったのを覚えています。

処置室のようなところのそばの部屋に連れていかれ、会わされたのは裕子ではありませんでした。隣の待合室のようなところに連れられて、婦人警官から「小樽警察署に行きます」と言われました。

そのまま警察の車両が誘導する中、長男が運転して小樽警察署へ行きました。報道関係者が警察署の前に多くいたのがわかりましたので、警察官が案内してくれて警察署の裏口

から入りました。

安置室で変わり果てて冷たくなった娘を見た時の衝撃が、今でも忘れることができません。あまりにも残酷です。こんな悲しい別れが起きるなんてひどすぎます。

裕子は司法解剖をされ、髪がなくなりました。なぜこんなひどい姿にされなければならなかったのでしょうか。

事故から3日後に裕子は無言の帰宅をしました。職場の上司の方々や同僚の方々、お友達がたくさん来てくださって、ありがたかったです。これも裕子が皆さんからかわいがられていた証しなのだと思います。

そう考えると、やはり裕子がいなくなったことを受け止めることができないのです。悔しいです。苦しいです。

そんな悲しみの中で最後のお別れをしました。

出棺の時、夫が人目も気にせず、大きな声で私に「最後なんだから娘の顔をよく見てやれ」と、号泣して2人で泣きました。

それ以来、裕子がない現実を受け止めることができず、日々心が乱れ、食べられない、眠れない日々です。あの日から私は出口のないトンネルの中で、一步も前に進むことができなくなっているのです。

自分に何が起こったのかもわからないままこの世を去った裕子の気持ちを思うと、あまりにも悲しくてつらいです。

私たちの人生は180度変わりました。心から楽しんだり、笑ったり、そんなことはもうできません。

今回の事故の後、被害者の遺族として捜査機関の方とお話をしたり、被害者参加をするということで弁護士ともお話をさせていただきました。

裕子のこと、事件のこと、そして自分の気持ちをもっとお話ししたいのですが、事件のことを思い出すとつらく、自分の言いたいことが話せない状態になってしまいました。

弁護士とは、加害者や証人に聞きたい内容などの打ち合わせもしました。本当はいろいろと聞きたいことはあるはずなのに、事件の衝撃があまりにも大きく、考えが浮かんできません。

それでも、あの子がなぜ命を奪われなくてはならなかったのか真相が知りたいです。

なぜ、加害者は大量にお酒を飲んでいるのに運転をしたのですか？

なぜ運転をしながらスマートフォンを見る必要があったのですか？

娘たちをひいた後、そのまま救急車を呼ばずにコンビニまで行き、たばこを買うことができるのか、その心理が分かりません。

そんな身勝手な行動で私たちの大切な娘たちの命が奪われたのです。しかも裕子は加害者の車で20メートル以上はね飛ばされ、事件現場で即死してしまっただけです。

裕子の死亡場所は病院ではなく、道路上なのです。こんなむごい亡くなり方があるのでしょうか。

これは車による通り魔的殺人と同じです。

裕子は「車の運転はうまくない」といって、いつも安全運転に努めていました。加害者にも被害者にもなりたくないというルールをしっかりと守っていたのに、とんでもない運転者の犠牲になってしまったのです。

こんな悲しいつらい思いをするのは、私たちだけで終わりにしてほしいです。そのために加害者には重い刑罰を求めます。今後、このような残酷な事故が起きない抑止力にならなければならないと思うからです。

加害者には娘たちの亡くなった7月13日を一生忘れないでもらいたいです。しっかりと自分のしたことの罪と向き合ってください。

私の命と引き換えに娘が生き返るならすぐに死ぬ

原野沙耶佳さんの母 悦子さん

海津被告の無謀、卑劣な飲酒運転により、命を落とした原野沙耶佳の母親でございます。一人娘を大切に育ててきた、私ども夫婦の無念、悲哀、怒りを、この法廷の場で、話をする機会を与えていただき、ありがとうございます。

昨年の7月13日以降、一人娘の突然の死を受け入れることができず、絶望、悲嘆に苦しんでいます。心身ともに異常をきたしたため、長年勤めていた知的障害者授産施設のヘルパーのパートを昨年の9月20日にやめなければならない状態に追い込まれました。現在も精神的に苦しく、激しい無力感があり、仕事ができない状態が続き、無職のままです。

私は、体質的に妊娠しても子供が育たず、流産しやすい体質でした。最初の子供は結婚して3年目に3カ月で流産しました。

沙耶佳は結婚して5年目に、7カ月の早産で、超未熟児として北大で生まれ、以後子供に恵まれることはありませんでした。担当の医師からは、娘は非常に危険な状態で楽観はできなく、今後1週間が生死を分けるヤマ場であると言われました。そして、助かっても障害が残る可能性があり、覚悟をしてくださいとの話がありました。

私は、手術後の激しい痛みの中、もしも娘が亡くなった場合を考え、急いで夫に名前を考えさせ、生まれたその日のうちに、東区役所に出生届を提出させました。たとえ1週間でも、夫婦の子供として名前を呼び続けたかった。そして、私にできることは、一生懸命母乳を搾り、毎日夫に北大病院に運んでもらい、娘が元気になるよう神仏に祈ることでした。祈りが通じたのか、娘は奇跡的に助かり、障害もなく、私たちのたった一人の子供として、すくすく優しい娘に育ち、夫婦の宝物となりました。私の両親も娘をでき愛しました。

そして、3人の生活が始まったわけですが、決して順風満帆ではなく、苦しいとき、悔しいとき、悲しいときもありました。けれど、3人で協力し合い、尊重し合いながら、穏やかに過ごしてきました。平成26年7月13日までは…。

私の父親は、平成23年4月から平成24年にかけて肺気腫で入退院を繰り返し、その後、右脚閉塞（へいそく）性動脈硬化症で右脚の膝から下を切断し、車いすが必要となり、介護施設でお世話になっていました。その後、父は脳梗塞を併発し、平成25年5月に亡くなりました。

平成23年4月からの2年間は、私は3人姉妹の長女として、母と夫、娘の4人で、父の看病看護をし、私たち家族は心身ともに疲れ果てていました。

父の一周忌を平成26年5月に行い、長女としての役目を終え、沙耶佳と秋ごろ、2人

で旅行をしたいと話を進めていましたが、海津被告の交通殺人により、それもかなわぬこととなりました。葬儀の後、しばらくしてから、娘の部屋を整理した際、預金通帳があり、かなりの金額を貯蓄していました。しっかり将来をみすえ、計画し、準備していたかと思うと、いとおしく残念でなりません。

そして、多くの娘の友人が、四十九日、月命日など、自宅に訪ねてきてくれ、沙耶佳の思い出を語ってくれました。娘は真面目で友達思いの優しく、真っすぐな子だったそうです。娘は良き友人に囲まれ、お互いに尊重し合いながら友情を育み、連絡をとりあい、旅行、食事、カラオケなど楽しんでいたようです。

7月26日には、葬儀のお礼を兼ね、娘の私物をいただきに勤務先に参りましたが、私物が少なく、制服、うわばき、電卓など数点で、机の中はきれいに整理されていました。そしてその時、上司の方が、当時のことを話してくれました。事故の翌日早朝、あわてて娘の机をあけ、仕事の状況を確認しようとしたら、給料の計算、支払いの準備等、前倒しでほぼ終わっていたそうです。

四十九日の法要には、通夜、告別式、繰り上げ法要にもご参列いただいた勤務先の社長と上司の方がお参りくださり、沙耶佳の思い出を語ってくれました。手際よく、しっかりした子で、事務の間違いも少なく、経理の中核でした。また、会社としてはできるだけ長く勤めてほしいと思っていましたとおっしゃっていただけました。専門学校卒業後9年間、病气、JR北海道の運休以外、遅刻欠勤もなく、真面目に勤めあげ、信頼も厚かったようです。

この忌まわしい事件以来、私どもの生活は一変しました。あえて娘を「殺された」と言いますが、沙耶佳は一人娘で、私たち夫婦の体の一部分でもありますし、心のすべてだったのです。ですから、現在、未来に希望とか目的もなく、死というものが身近なものとなりつつあります。夫婦ともども身辺整理を行い、いつでも娘の元へ行ける準備をしています。

沙耶佳とは姉妹のように仲が良く、いつも旅行、グルメ、ファッション、音楽などの話をし、盛り上がっていました。事件当日は、私が朝、JR岩見沢駅まで、娘を車で送っていきました。その際、楽しんでくるよと言ったのが最後の言葉となり、楽しそうに笑いながら駅へ向かって歩いていきました。これが最後の別れになるとは…。

ドリームビーチを数分早く出ていけば、娘たちは札幌市の市道の歩道を、和気あいあいと、楽しく談笑しながら歩いていたことでしょう。娘はまだ29歳。3分の1の人生でした。まだまだ仕事で夢をかなえ、友と友情を深め、さらには結婚して子供を産み、幸せな家庭も築いたであろう3分の2の人生を残して…。

私の命と引き換えに娘が生き返るなら、私はすぐにでも死にます。もう私たち夫婦には未来の夢はありません。娘が幸せな結婚をし、いつも明るい家庭の中にあり、私が孫を抱くという夢を描くこともできません。本当に寂しい余生になりました。

海津被告とご両親に申し上げたいことがあります。

私どもの代理人弁護士へ届いた海津被告のわび状は、なぜ9月中旬なのですか。娘がかわいそうです。これからの人生のすべてを一瞬のうちに奪われたのです。こんな反省もしていない男にです。本当に不憫（ふびん）でなりません。

なぜ、ご両親は一度も焼香も謝罪にも来られないのですか。手紙すらありません。被害

者遺族、被害者家族を不幸のどん底に落としきれながら、加害者と加害者家族の反省と誠意はどこにあるのですか。事の重大さを理解しているのでしょうか。

私は生きている限り、絶対海津被告を許すわけにはいきません。加害者家族も許さない。これが、私の海津被告とご両親に対する判決です。

母親としての心情を聞いていただき、ありがとうございました。

夕方、娘が帰ってくる気がする 涙が止まらない

原野沙耶佳さんの父 和則さん

これから、原野沙耶佳の父親である私が意見陳述いたします。つきましては、お手元のモニターに亡くなった娘たち3人と重傷を負った中村さんの写真が映ります。その写真をご覧になった上でお聞きいただければと思います。

小樽の飲酒ひき逃げ事件に巻き込まれ、29歳の若さで命を略奪された原野沙耶佳の父親です。

いまだ癒えぬ悲しみの中、司法の場で、心情の意見陳述をさせてくださり、ありがとうございます。今は亡きまな娘も喜んでくれると思います。

娘は結婚して5年目の初めての子供でした。7カ月の早産で980グラムの超未熟児でしたから、3カ月間、北大病院の保育器の中で育ち、私は自宅から毎日、妻の母乳を持って病院へ通いました。少しずつ大きくなっていく娘を、保育器の中に手を入れて、頭をなでたり、母乳を飲ませることが、親として非常にうれしく、至福の時でした。

幸いにも娘は、障害も後遺症もなく、すくすくと親思いの優しい子に育ってくれました。

専門学校卒業後、札幌に就職が決まっても、私どものことを案じ、自宅からの通勤を選んでくれた思いやりのある優しい娘でした。

私は、毎日朝6時25分ごろ、JR岩見沢駅まで、娘を送っていくのが日課でした。父親として短い時間ですが、楽しいひと時で、いつか、好きな人ができたよと言ってくれる日を心待ちにしていました。また、もっともっと話をしたいことが、山ほどあったのに無念です。

娘は身元不明の遺体でした…。

7月13日の午後5時ごろ、NHKのニュースで事件のことは知っていましたが、それほど心配はしていませんでした。ただ、当初友だちと小樽に遊びに行くけれど、午後7時ごろには帰宅するとの話だったのです。念のため、午後6時ごろ、携帯に電話をしたのですが、呼び出し音が鳴るだけでした。不安でしたが、多分カラオケにでも行っているのだと思っていました。

その後、何度も電話・メールをしましたが、状況は変わりませんでした。心配になり、再度NHKのニュースを確認したところ、3人の女性が死亡し、1人の女性が重傷との内容でした。私は、嫌な予感にかられ、唯一、中村さんのお嬢さんが娘の友人であることを思い出し、午後8時30分ごろ、中村さん宅へ電話をしましたが、留守電でした。午後8時50分ごろ、岩見沢警察署に電話をし、情報を得ようとしていましたが、詳細は不明とのことでした。

意を決して、午後9時ごろ、小樽警察署に電話をし、「娘の名は『原野沙耶佳』です」と伝えると、「被害者に該当する」との返答でした。数秒間の沈黙の後、「娘は…」と話しかけると同時に、「亡くなりました」との絶望的な言葉でした。

娘はその日、運転免許証のような身元を証明するものを持ってなかったのです。かろうじて、歯科医院の診察カードがあり、私の電話で照合を行い、身元が判明したとのことです。現在、札幌医大に遺体があり、小樽警察署に搬送しますとのことです。

私は、妻と義母の3人で小樽警察署まで高速を使い、自家用車で急ぎ向かいましたが、変わり果てた娘に対面できたのは、翌日の午前2時30分でした。幸い顔には損傷はなく、すぐ娘だと分かりましたが、左の耳に綿が詰められ、血がにじんでいました。恐らく、頭部が致命傷だったのでしょうか。

私は、沙耶佳が生まれた時のように、いとおしくそっと頭をなでていました。傷ついた左手もそっとなでていました。とめどなく涙があふれ、そばに寄り添った妻も義母もただただ泣いていました。そして、私は、担当の警察官に「間違いなく娘です」と申しあげました。

今でも後悔しています。親として自分を責め続けています。なぜもっと早く警察に連絡をとらなかったのかと、ほぼ即死状態でも、あたたかい娘の体をもう一度抱きしめたかった。

事件の翌日早朝、兄弟、親類へ娘が飲酒運転の車にひき逃げされ、一命を落としたことを電話にて連絡をいたしました。だれもが、早朝のテレビニュースにて、娘の死を知っており、怒りと涙声で相手の電話を持つ手が震えているのが、何故か感じられました。

意にそわない司法解剖により、遺体の引き取りは7月16日となり、結果、初七日は告別式となりました。

葬儀は、娘の勤務先の職員の方々、学校の同級生、友人が大勢参列、焼香していただき、斎場は、たくさんの花であふれんばかりに埋めつくされました。沙耶佳の早すぎる死を悼むかのように…。司法解剖により遺体の引き取りが遅れたため、納棺師の方が、毎日お化粧をしてくださいました。でも、娘の顔は日に日に変わり果てていきました。私ども夫婦は、泥にまみれ、地べたに倒れ、のたうちまわるような苦しみの中、葬儀を執り行いました。

後日、遺留品の引き渡しの連絡をいただき、小樽署の一室で、娘の服、身に着けていたものを、血眼になって探し回りました。その遺留品の中にデジカメがあり、今回の事件で亡くなった3人が写った写真がありました。撮影者は中村さんのお嬢さんで、3人の娘たちは笑顔で楽しそうに写っていました。撮影時間は、平成26年7月13日午後3時49分49秒でした。

一人娘を突然失い、途方に暮れ、毎日が悲嘆、絶望の中にあります。遺体安置所、何度も訪れた事故現場の記憶がよみがえるフラッシュバック、不眠、無気力等、精神的に追い込まれ、感情のコントロールができない状態にあります。

仕事の面でも、私は3年ほど前、生命保険、損害保険の個人代理店として独立し、基盤も整い、これからという時に、心身ともに異常をきたし、新規等の前向きな仕事ができない状況に追い込まれました。狭い道路を運転することが怖いのです。特に前に若い女性が歩いていると、胸が苦しくなるのです。毎日悲しみだけが積み重なる中、私の日課は毎朝

毎晩、娘の遺骨と遺髪を痛かったろう、苦しかったろうとなでていることです。娘は、納骨はせず、手元に置き、私が死んだ時に一緒に墓に入れさせます。決して一人にはさせません。

娘は、海津被告によって3度殺されました。ひき逃げにより見捨てられ、死因を究明するため司法解剖され、頭部が致命傷のため解剖により大切な長い髪をそられ、かつらである世へ行きました。

車は乗り方を間違えれば凶器となり、酒は理性を狂わせます。海津被告は、十分な睡眠をとることなく、多量の酒を飲み、特段の用事もなくスマートフォンを操作しながら、4人の娘たちを後ろからブレーキを踏まず、ひいて逃げました。しかも、娘たちが苦しんでいる中、当初の予定どおり、たばこを買うという非道な行為を許すわけにはいきません。なぜ、たった1個のたばこのために、突然娘は命を絶たれなければならなかったのでしょうか。

一人娘がこつぜんと消えてしまいました。一言の別れの言葉もないまま、私たちのそばから消えてしまいました。いまでも夕方になると、娘がいつものように「ただいま」といって仕事先から家に帰ってくる、とふと思ってしまいます。しかしすぐ現実に戻ります。そして涙が止まりません。ただ、妻とともに黙って泣いております。

また、妻も私も何度も体調を崩しながら、妻は仕事を失い、私も十分な仕事ができない状況に追い込まれました。これからも私ども夫婦は、沙耶佳の面影をしのびながら、絶望、無念の中、あきらめがつかず、死ぬまで悲しみを背負いながら生きていかなければなりません。

平成27年2月5日 沙耶佳 満30歳の祝

仏前にショートケーキ1個供える

海津被告に沙耶佳の父親として、法律ではなく、胸に秘める判決を申し上げます。

被告人は、危険運転をしていないと否認していると聞きました。酔っていてもちゃんと運転できると思っていたということでしょうか。それではどうしてこんな事件が起きたのでしょうか。不注意で7秒も8秒も脇見をする運転手はいるのでしょうか。これは故意の犯罪であり、殺人と同じで、決して許すわけにはいかない。沙耶佳が天寿を全うしたであろう年齢まで、真剣に自分が犯した罪と向き合い、内省し、一生をかけて償わせたい。

最後に、今日は、最愛の一人娘を失った父親の心情を聞いていただき、ありがとうございました。